View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

特集　座談会

学習ツールいまむかし ―大学における学習ツールの変遷とその功罪

日　時：2011 年 11 月 30 日（水）17 時 30 分～ 19 時 30 分
場　所：立教大学池袋キャンパス　太刀川記念館２階

司　会：

山口　和範　　本学経営学部教授

参加者：

中島　俊克　　本学経済学部教授
全学共通カリキュラム運営センター教育研究・広報委員
総合教育科目構想・運営チームメンバー
佐藤　邦彦　　本学異文化コミュニケーション学部教授
全学共通カリキュラム運営センタースペイン語教育研究室室員
細井　尚子　　本学異文化コミュニケーション学部教授
全学共通カリキュラム運営センター中国語教育研究室主任
柳　真利奈　　法学部法学科 4 年次
渡辺　　栞　　異文化コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科 3 年次
落合　敏彰　　経営学部国際経営学科 2 年次

○**中島**　全カリ広報委員をしております経済学部の中島です。まず、この座談会の趣旨を説明させていただきます。

いわゆる全カリというのは、全学部、全学年で履修してもらうということで、いろいろな学部の学生諸君の意見を広く聞ける立場にあって、普段、学習で悩んでいることを聞いて、教育向上の一助としたいと日々考えています。そういうのを FD と言うのですが、FD の一環、全カリ広報の一環としていろいろ案を練っているうちに、最近、学生諸君が学習で使う道具が我々のころと変わってきて、それに教える側がとまどっているという話が出てきたわけです。

直接この話をするきっかけというのは、電子辞書を使うのをどうするかということなんです。実は、語学の先生の間でも意見が割れているんです。とにかく電子辞書は手っ取り早いから、義務として買わせても全クラスで使う、という人もいれば、やっぱり紙の辞書で調べて、そこの部分だけではなくて、じっくり読む、重たいものだけれども買い、それを持ってきてもらって授業で使うというスタイルの先生もいて、分かれているんですね。先生方についても意見はいろいろあるが、君たち自身がその辺をどう思っているか。あるいは、自分の授業ではどうなっているか、本学でどう

中島　俊克

なっているか。その辺のところを聞きたいということです。

それと関連して、例えば、パソコンを勉強の中でどういうふうに使っているか、大学でどういう環境が欲しいか、あるいは、さらに進んで携帯とかスマホも、勉強の道具として使うということがあるのかということなどもお聞きしたい。

これは、僕が人権・ハラスメント対策センター委員の活動の中で出席している学生から話を聞く学生サポーター会議というものがあり、そこで教室で私語をすることや携帯をかちゃかちゃやっているのは、やっぱりハラスメントじゃないかという学生がいました。別の学生は、高校時代には、それはもう教室で許容されている。先生が言った、分からない言葉をすぐに調べて授業についていけるから、むしろ推奨されている。高校の現場でもそういうことは言われているようです。道具をどういうふうに使ってもらうか、これを一つの座談会のテーマとして取り上げて、お互いに参考にするという場にしたいということで今回、このような企画をしたわけです。

それで、大体の趣旨も分かりましたでしょうか。それでは司会の山口先生お願いします。

Ⅰ．電子辞書の使い方

○**山口**　司会を務めます、経営学部の山口です。それでは、まず最初に現状を知るということで、集まってもらっている３人の学生の皆さんに、電子辞書の利用状況と、合わせて紙の辞書とどういう使い分けをしているかというのを一人ずつ、自己紹介も兼ねてお願いします。

英語だけじゃなく、初習言語を勉強したときの状況も含めて教えてください。

○**柳**　法学部法学科４年の柳と申します。よろしくお願いします。

私は電子辞書を愛用しております。英語と中国語を履修していたのですが、どちらにおいても私は電子辞書を使っていました。なぜ電子辞書がいいかというと、手っ取り早さというのはもちろんですが、発音も聞けるんですよね。どういう発音なのかを耳で覚えられるし、手書きでも覚えられる。分からなかった単語は単語帳に入れて暗記としても使えるといった点では、使いやすさは、電子辞書が断然いいと思っています。

○**山口**　中国語専用の電子辞書じゃなくて、英語も入っているやつですか。

○**柳**　英語も中国語も全部入っています。

○**山口**　紙はもう全然使わないですか。

○**柳**　紙は、高校受験までしか使っていないです。

○**中島**　では、中国語の紙の辞書は持っていないのかな。

○**柳**　一応、買うようにという指示があったので買ってはいるんですけど、やっぱり電子辞書を使っています。

○**落合**　経営学部国際経営学科２年の落合と申します。よろしくお願いします。自分は全く電子辞書を使わなくて、大学受験のときは紙の全く同じ辞書を２冊買って、片方を学校に置いて、片方を家に置いて、とにかく辞書を読むことで英語力をつけました。今はどうか

というと、去年のフランス語の授業では、全員、紙の辞書を買うように指示されて使っていました。
○**山口**　買わされたんですか。
○**落合**　はい。買うように言われたので、それを使ってフランス語を勉強していました。今、国際経営の勉強をしているので、そこの授業では辞書を使っているかというと、実は使っていないです。自分はスマートフォンを辞書として使っています。
○**山口**　1年間、海外に行っていたときはどうしていましたか。
○**落合**　携帯電話の辞書機能を使っていました。
○**山口**　紙は持っていかなかったのかな。
○**落合**　はい。重いので持っていきませんでした。
○**渡辺**　異文化コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科3年の渡辺と申します。本日はよろしくお願いいたします。私は、異文化コミュニケーション学部ということで、先生たちもご存じのとおり、語学がメインの学部です。私は1年生から朝鮮語を履修して、留学も韓国に行ってきました。私は、初習言語だったということもあって、もう辞書を手放せない状態で、1年生の最初は紙辞書を買いなさいというふうに先生に指示を受けて買ったんですけれども、やっぱりそれをひとつひとつ引いていくのって、特に初習の最初の段階では、知らない単語が多すぎて、要領よくこなせないので、電子辞書を使うようになりました。

留学に行ってからも、ボキャブラリーがないので、外を歩くのが、辞書なしでは怖くて、いつも電子辞書を携帯していました。その癖が今もとれなくて、語学の授業がなくても、いつも辞書を持ち歩くんですけど、それはやっぱり電子辞書です。

電子辞書に載っていない単語っていうのがあるんですね。そういうときは、スマートフォンを使って、インターネットでその単語を検索するんですよ。韓国のサイトを使って。こういう意味なんだとか、俗語とかは特に載っていないので、そういうものを使わないとできない。ただ、メインはやっぱり電子辞書という感じですね。
○**山口**　ものを読むときに、スマホで一語一語引いていたら、かなり通信料かかりませんか。
○**渡辺**　今、スマートフォンって、私はiPhoneを使っているんですけども定額なので、幾ら使っても同じです。
○**山口**　では、教員の立場で、お二人。歴史や変化も踏まえてお話しいただけますか。
○**佐藤**　携帯すら持っていない僕はどうしたものか。異文化コミュニケーション学部の佐藤といいます。よろしくお願いいたします。全カリではスペイン語教育研究室に所属しています。実はスペイン語教育研究室では、電子辞書はあまり推奨しないスタンスなんです。もちろん、今いろいろな話を聞いていて、ああ、なるほどと思ったこともあるのですが、結局、電子辞書自体がいい、悪いじゃなくて、どういう目的に合わせてどう使うか、そこが重要で、そういう意味では、必ずしも電子辞書はだめということではないと思います。

ただ、スペイン語教育をやっている側の立場からいうと、時々目につくのは、学生が、その場ですぐ引けるから、逆に安心しちゃって予習や課題をやってこない。当たりそうになったときに初めて引き始めるけど、それでも瞬時にちゃんと調べて答えられるのであればいいんですけど、なかなかそういうことはできないし、結局、授業中にその場で慌てて引いたりしていることによって重要なことを聞き逃しちゃったりなんていうことがあって、それは、

実は紙の辞書でも同じなんですよね。授業中にそういうことをやりだしたら。ただ、見たところ、電子辞書を持っている人のほうが、やってこないでその場で、という率が高いので、それがいけないから、僕は授業中にこう言っているんです。スペイン語では推奨はしていないけれども、買ってしまったものはしょうがないから、むしろ使いこなしなさい。逆に、電子辞書があって便利だからといって怠けていると勉強できなくなるから、そこを頼りすぎないように気をつけなさいねと。

一つ問題なのが、頼りすぎて勉強しなくなっちゃうという問題。それから、特にヨーロッパ系の言語だと、動詞の活用とか、語形変化をきちんと覚えなければいけないというのがあるんですけれども、電子辞書だとボタン1つで活用表が一気に出て、要するに、覚えていなくても、ちゃんと規則に従って考えなくても、そこに出ているのを見て答えれば当たりになっちゃう、みたいなことに慣れちゃうと、結局、覚えるべきことを覚えないで済ませちゃうなんてことも起こり得るので、そういう意味で、特に初級の段階では、なるべくそういった便利なツールに頼りすぎないで、しっかり勉強しなさいという考えがあります。

もちろん、さっきお話にあったように、初級段階というのは知らない単語が多すぎて大変だからというのは、それもそうだなと思ったんですけど、一方で、教育的な見地からは、初級の段階でちゃんと苦労して覚えたことが、後々より残っていく部分もあるという考えもあるので、なるべく初級段階ではしっかり紙の辞書で頑張って引いて勉強しなさいと。逆に、中級以上になると、単語を引くためにすごく時間をとられるのはちょっと無駄だから、そこであまり時間をとらずに、その代わり、たくさん文章を読むとか、その文章の内容に基づいて、ディスカッションのようなことをやるとか、そこで出てきた表現を応用して会話練習をやったりとか、もっと違うかたちでの、よりステップアップしたことをやる。そこにエネルギーを割くために、辞書を引くところは時間を省略しようと。そこで電子辞書を積極的に使って、違うことをいっぱいやりましょうと。僕は個人的には、そういう使い方は非常によいのではないかと思っているんですね。

佐藤　邦彦

逆に、初級の場合も、もし電子辞書を使って、あまり辞書を引く労力を取られないようなやり方っていうことを考えた場合には、実は、授業方法とか、教科書とか、そういった部分の中身が、電子辞書を使う前提で変わっていかなきゃいけない。現状の教科書や授業スタイルの中では、なかなか初級では、そのようになっていないので、電子辞書はやめたほうがいいよと言ってしまっているわけです。スペイン語としてはそんな感じです。

○**中島**　あまりに便利だから、覚えなきゃいけないことを覚えない。例えば、掛け算の九九も、覚えなくたって電卓たたけば出てくる。しかし、覚えなくていいかというと、そうはいかないので、動詞の活用ぐらいはやっぱり覚えてもらわなきゃ困るということですね。昔は不便だったから、一生懸命覚えていた。

○**山口**　最近、黒板に漢字が書けないですね（笑）。
○**細井**　書けなくなりましたよね（笑）。
○**山口**　では、細井先生、お願いします。
○**細井**　異文化コミュニケーション学部の細井です。全カリでは中国語教育研究室の主任です。中国語は、科目担当者が30人を超えているんですよね。みんなで意見を交換していくと、紙辞書派と電子辞書容認派と、どうしても2つに分かれてしまう。自分たちが育ってきたときは紙辞書なので、紙辞書を使った人間というのは、辞書は読むものだという感覚があって、単語を引くとか、文字を確認するというのは別のレベルの問題だという感覚があるんですよね。電子辞書もいいのではないかという方々は、先程言ったような利便性。それから、コンパクトなので学生が持ってきやすい。あと、気楽に引けるという点です。

一応、いろいろ考えた結果、シラバス等では辞書について記載する際は併記にしました。紙辞書をまず書いて、電子辞書の使用も可と。担当の先生のご判断で、どっちを推奨しているかというのはばらつきがあるんです。ですけれども、例えば私でしたら、どっちを選ぶかは学生に選ばせます。ただし、携帯やスマホにダウンロードしたものは禁止になっています。

細井　尚子

○**山口**　禁止ですか。
○**細井**　禁止です。毎回小テストがあるんですが、不正行為が判断できないので。携帯・スマホは管理できないという理由から禁止。
○**山口**　教室では使ってはいけない。
○**細井**　そうです。もちろん、試験のときなんかも携帯は出せませんので、そういうかたちにしています。
○**中島**　先生ご自身は？
○**細井**　私は紙辞書も電子辞書も両方とも容認。最近思うのは、電子辞書だったらいつも持ってきてくれるかなと思ったんですけど、結構持ってきていないよね。じゃあ調べてみればと言ったときに、紙の学生は結構持ってきているんだけど、電子辞書の学生は意外に持っていなかったりして、あれっと思うことがあります。
○**中島**　金額がちょっと高いのかな。
○**細井**　高いのかな、ソフトみたいなものって。
○**渡辺**　高いです。5千円ぐらいは。
○**山口**　でも、今セットみたいにして売っているんじゃないの？
○**渡辺**　私は入っていなくて、別で買います。
○**細井**　入っているの、少ないんじゃないかな。
○**佐藤**　大学とかで買うと、やっぱりいろいろな言語を勉強している学生がいるので、そういう前提で商品を組んでいるんですよ。一般の電器屋だと、英語、日本語以外はまず入っていない。5千円というのは、スペイン語も大体同じだと思います。
○**細井**　昔は、電子辞書になっている辞典は、語彙の量などの問題があったのであまり推奨していなかったんですけど、今は、改訂されたこともあって併記するようになりました。
○**佐藤**　さっきは使い方の問題を言ったんですけど、辞書の内容に関しても、日本で出ているスペイン語対応の電子辞書って、紙で出ている定評のある辞

書は幾つかあるんですが、そのうちの1冊しか入っていないんです。

○**細井**　そうそう、中国語も1冊だけ。

○**佐藤**　もとになっているその辞書というのはだめな辞書じゃないんですけれど、逆に言うと、せっかく使うんだったら、例えばどこどこ社のあの辞書と、あの辞書と、2～3種類入れて使えるようになったほうがいいんだけれども、あと紙の辞書だと4千円ぐらいで買えるのが、たった1冊のために2万円ぐらい出して機材を買うのもどうかなという、ちょっと違う理由ですけど、そういう理由もあります。

○**中島**　電子辞書のほうは、特に初習言語の場合は、クオリティーに問題がある場合もある。

○**細井**　中国語では、推奨している紙辞書は結構いいものを、初めてやる語学だから武器に投資しなさいと言って、7千円ぐらいのものを買いなさいと言っていますね。電子辞書のほうが安いんじゃないかな。

○**渡辺**　載っている単語は圧倒的に紙の辞書のほうが多いです。

○**佐藤**　あと、例えばネットにつないだ場合に、つないだ先がオーソリティーのあるというか、信頼できる辞書情報サイトで、そこでちゃんと調べることができて、かつ、逆に辞書として使う場面は、それ以外の用途には絶対に使わないということが守られればいいんですが、実は、ある授業で、その場で学生に辞書を引きながら読ませて、問題を解かせて提出させるというのを行ったときに、見ると、翻訳サイトにアクセスしている学生もいる。それは、先ほど不正という話がありましたけど、不正という問題もそうですが、やっぱりそういうことで済ませちゃうという人が増えてくると、結局、勉強にならないから、教師の側からすれば、そういうのはやめてほしい。できれば、授業内では使わない。例えば、個人的に家で使うのは自由ですよ。だけど、教室内では使わないようにしてくださいというようなところは、どうしても出てくるのかなという感じがします。

○**細井**　パソコンは使わせていますよね、授業中。

○**山口**　パソコンが出てきたときに、辞書の他に印象的だったのは、リクルートが会社案内を以前は紙で配っていたんですよね。今の4年生は紙じゃないと思うんですけど。実は、中小企業があれを紙のままでお願いしたいと言っていた。なぜかというと、電子辞書と一緒で、ピンポイントで選ぶじゃないですか。そうすると、見てくれないと。いわゆる辞書のときに、ぱっと開いてたまたま見た、そこから何か勉強するというのは、電子辞書じゃあり得ないじゃないですか。だから、たまたま開いて、調べようと思ったものの前につい目がとまって、みたいなことというのは、学習のプロセスでいうと、結構重要な気がするんですけど、言語教育の立場から言ったときに、その点は電子辞書になってしまったときの弊害というものもあるのかなという気がして。

落合君に聞きたいんだけど、辞書でずっとやっていたときって、調べようと思った単語以外のところに目がいかなかったかな。

山口　和範

○**落合**　そうですね。もうとことん読み尽くす感じで、とりあえず

1個自分で調べたいのと、それにプラスして、隣も、隣もと見る。というのは、やっぱり受験生だとどんどん語彙を増やしたいので、しかも重要な単語って大体赤字で太くなっているので、とりあえず自分の調べた単語と、赤字の太いところを見て、そこも覚えておくか、みたいな感じのことはよくありました。

○**中島**　紙派の先生方がこだわるのは、やはり電子版には問題があって、一覧性というんですけど、要するに、偶然、目に入ってくる情報に意味がある。電子版だとそれができないんだと。

○**落合**　電子辞書だと、例えば会話を聞いていて分からない単語を調べるときに、「de」なのか「di」なのか、耳で聞き取れないときがあって、それを紙辞書の場合だと、ちょっと時間はかかるんですけど、ぱらぱらめくりながら、見ていくじゃないですか。それをすることによって勉強になるときもあって。僕はそういうときに紙辞書が結構役に立ちました。

○**山口**　iPadとかは使っているのかな。

○**渡辺**　使っていないです。

○**落合**　使っていないです。

○**山口**　iPadの辞書だと、基本的に紙に近い。

○**中島**　ページが全部出てくるからね。

○**山口**　だから、電子辞書は、完全デジタル化されているので、実はiPadって半分アナログ的なところがあって、あれだとちょっとそれに近いことができるんじゃないかなと。それと、いいかげんにぱっとめくった、みたいなことの機能もあるはずなので、割とアナログのよさというのを、iPadって持っているんじゃないかなと思ったことがあります。

○**細井**　紙辞書の最大の欠点は重たいということなんですよね。

○**山口**　そういう意味で言うと、iPhoneなんかでも、いわゆるアナログ的なかたちでページを見ているときってありますよね。

○**落合**　そうですね。ただ、そういうコンテンツを買うと高いじゃないですか。だから、無料の辞書サイトを使ってしまうことが多いです。

○**中島**　今聞いて分かったと思うけど、無料のものは、相当クオリティに問題がある。翻訳とかも一緒に出てくるから、やっぱり現実的に言うと、学生が覚えないという問題がある。それが電子辞書を禁止する大きな理由です。その辺はどうですか。

○**柳**　私は逆に、電子辞書のほうが、覚えるという点では使っていました。私の考えでは、紙辞書は読みもので、調べる、覚えるという意味では電子辞書の方が使えると思っています。音も聞こえるし、関連の語彙、変形した語彙も教えてくれる。そのため、覚えるという点では、頭に残るのは、私は電子辞書でした。

○**佐藤**　まじめに勉強する人は、しっかり使ってもらえればすごくいい。何でもそうだと思うんです。つまり、利便性があったときに、利便性をいいほうに活かす使い方をすればいいんです。だけど、便利だからいつでもやれると思って、実際にやらない、みたいになるといけない。そういう話なので、逆に言ったら、使うんであれば、どう使うかの指導というようなことを、こちら側も考えていかないと。学生のほうもどう使うのが一番より効果的で、勉強になるのかということがないまま、使っていいよと言われても、言い方は悪いですけど、それで怠ける人は怠けてしまう、みたいなところが一番問題なので、電子辞書自体がいい、悪いじゃなくて、使うとすればどう使うのがいいか指導する必要がありますね。また、それに応じた、電子辞書を使う前提での授業の展開の仕方というのは、どう

いったことが考えられるか。そういうことは、我々の側が考えていかなきゃいけないことなのかなと思います。
○**細井**　趨勢的にも、絶対、電子辞書に移っていくんだろうなとは思っています。
○**山口**　教員の側がついていっていないということがある。
○**細井**　例えば、紙辞書を図書館とかで簡単に使えるように多数置いておくとか、確認したいときにそこでできるようにとか、何か対応は考えなければいけないかなとは思っています。今、ランゲージセンターに置いてあるんですけど、でも、やっぱり使う学生はそんなに多くないですよね。だから、電子辞書の使い方を指導しなければいけないというのは、確かにそうかもしれない。でも、教員で使いこなしていない人が多いということも含め、どこまでできるかなというのは、疑問に思うところです。

Ⅱ．パソコンとインターネット

○**中島**　やっているうちにパソコンの問題が出てきましたけれども、君たちパソコンは持っていますか。
○**細井**　持っているでしょ？
○**中島**　持っていない学生が、1年、2年にはだいぶ増えてきて、もうスマホでいいと。
○**渡辺**　確かに必要ないかも。
○**中島**　文書作成、ワードでレポートを出す。主にそれですよね。でもこの間、スマホで2000字のレポートを書いてきた学生がいた。
○**細井**　すごいですね。
○**中島**　電車の中で、2時間、通学時間があるから、その間に書いた。要するに、ほとんどコピペなんですよ。僕は、レポートでコピペでも、ちゃんと出典を示してあれば認めていますから。そうするともう、30分もあればスマホでできてしまうという。自分で書くなら確かに大変でしょうけどね。自分で書く場合は、キーボードがあったほうがいい。考えてみると、今、パソコンのメリットってそれだけかもしれません。
○**山口**　ただ、自分は統計が専門なので、計算させるとかいうと、本来のコンピューティングという意味では、やっぱりもうパソコンじゃないと。スマホじゃ全然できない。
○**中島**　全然できませんか。
○**山口**　ほとんど。データの規模の問題です。例えば、コンビニのPOSデータを入れて何かをやろうとすると、パソコンじゃないとできないので、そういう意味で言うと、本当の計算機的な役割と、スマホでできる部分というのは、たぶん切り分けられていると思うし、基本的に昔の大型計算機と今のスマホでは、スマホのほうが能力高い。
　ちょっと先に、ネットの、ウィキペディアの問題について聞きたいのですが、やっぱり皆さん結構参考にしていますか。
○**落合**　僕はあまり使わないです。
○**柳**　私もあまり使わないです。
○**渡辺**　私も使わないです。
○**山口**　本当ですか。教員のほうが使っているのかな。
○**中島**　ウィキがなければレポート書けないでしょ。
○**山口**　ただ、基本的にGoogleは、ウィキペディアが最初に表示されるでしょ。あれはなぜああいうリンクになっているのかがちょっと分からないんだけど。
○**佐藤**　アクセス頻度の高い順に出るんですか。
○**山口**　それもだし、あとはちょっと広告の観点があるのかもしれないですけど。
○**中島**　君たち、Googleやるにしても、普通は大体スマホでやっているでしょ？

パソコンでやりますか？

○**落合**　特にどっちに重点を置いているという気は、自分はしていないんですけど、パソコンを開いているときはパソコンで、通学のときとかはスマホでという感じです。

○**渡辺**　私はパソコンかもしれないです。3年生なので明日から完全に就活生なんですけど、この間、合同説明会の予約をすることになったんです。4年生でもう経験されているからご存じだと思うんですけど、スマホだと遅くて予約できないんです。ネット接続が遅くて、ああいうのって、開始40秒とかで説明会の席が全部なくなるんです。最初、スマートフォンでやったら、1日目のほうの説明会の席が全然取れなくて、アクセスもできなくて、2日目の日曜日の席は絶対に取らなきゃと思って、もうパソコンの前で待機で、パソコンでやったら取れたんですけど、そういう意味で、パソコンのほうが圧倒的にネットが速いんです。

○**山口**　たぶんそれはパソコンというよりは。

○**中島**　大学での環境の問題ですね。

○**山口**　だから、スマホを、例えばiPhoneを、いわゆるソフトバンクの回線ではなくて、大学の回線経由でやれば速いと思う。

○**渡辺**　学校でWi-Fiを使っていたんです。それでも遅くて。

○**山口**　それは学校の責任かな。

○**渡辺**　それを、4年生の私の学部の先輩たちが、やっぱりスマートフォンに頼り切っちゃうとどうしても取れないし、遅いから、絶対に就職活動が始まったらノートパソコンを持ち歩きなさいと言っていたんですね。だから、私は最近はもう、ずっとパソコンですね。

○**中島**　通信速度の一瞬の差で就活が決まるという。

○**渡辺**　そうなんです。

渡辺　栞

○**佐藤**　通信それ自体の速度もそうかもしれないし、あとやっぱり機器自体の処理容量が、パソコンのほうが大きくできるから、やっぱりデータ処理が早いということがあるかもしれないですね。

○**中島**　つまり、パソコンのメリットっていろいろあるから、3、4年生諸君は、まだかなり使い続けていると。でも、今の1年生というのは、パソコンを使う頻度は相当減っているというのが僕の印象です。経済でも情報処理を1年で教えるんだけど、パソコンを触ったことがないという学生がゼミに入ってきている。

学習ツールとしてのメリットは、計算ができるというのと、キーボード操作が速いっていうことですね。文書作成とか。

○**山口**　例えば、大学のPCの貸出で言うと、やっぱり大きいのは専用のソフトがいろいろ入っていて便利ということかな。

○**中島**　表計算ですか。

○**山口**　いや、表計算はたぶんスマホでも可能っていえば可能ですよね。

○**落合**　自分がパソコンを使うようになったのは、全カリの英語の授業でパワーポイント、あと、ライティングでワードを使わなければいけなかったので、そこでパソコンを使うようになってという感じです。最初の入りはそこでした。

○**中島**　経営はプレゼンをやりますからね。プレゼンは、確かにパソコンがないとね。
○**山口**　意外だったのは、ウィキペディアをあまり使わないというのは、まわりの学生を見ていても同じかな。
○**渡辺**　まわりの学生の中には使っている人もいます。でも、私が受けている授業の先生は、ウィキペディアとかはあまり信じないでくださいとおっしゃる先生が多くて、そういうところから引っ張ってコピペして、出典をちゃんと出しているけど単位を落とされちゃったりする友人がいるんですよ。そういうのを見ちゃうと、使いたくないし、確かに、本当に書籍とかを見ると、全然違う内容のことが書いてあったり、逆のことが書いてあったりする場合も多々あるんです。そういう意味で、1年生の最初のころは使おうかなって思ったんですけど、学年が上がるにつれて、ああ、よくないなと思って使わないですね。
○**山口**　例えば、図書館の利用。印刷物とネット上の資料の違いというのは、結構、意識しますか。
○**渡辺**　私が取っている授業の先生方は、書籍を勧める先生方がすごく多くて、ネット上の情報は、例えば、1つの事象について、概要を理解するのにはとてもいいけど、細かく分析したり、研究するのに向かないとおっしゃるんです。そういう意味で、やっぱり書籍のほうが具体的に書いてあるし、信憑性がある気がして、ネットよりは書籍が、学習に関してはいいです。
○**佐藤**　お二人はどうですか。
○**柳**　ウィキペディアは、やはり内容が浅いと感じています。今から調べるものの概要をとらえるというぐらいでしか使わないと思います。本当に論文を書くというレベルになると、ウィキペディアは使いものにならないので、私はほとんど使っていないです。
○**落合**　自分がウィキペディアを使うときは、芸能人のことを調べるときだけです。（笑）ほかに関しては、授業でも特に参考にならないという話は聞いているので使いません。1年のときからあまり使った記憶はないんですけど、2年生になって調べものをするときは、もうウィキペディアに頼らなくても、的確に欲しい情報を得られるサイトを知っているので、そっちを最初から見ています。
○**中島**　経済、経営系はだめですよね、ウィキは。
○**細井**　ウィキペディアと同じように、『広辞苑』だけでレポートを書いてくる学生がいますよね。『広辞苑』だけで書かないでと思うことはありませんか。
○**山口**　『広辞苑』で書くって、何を書くんですか。
○**細井**　『広辞苑』で調べた語義の定義はこれであるとか、同じレベルなんですよ。『広辞苑』とかウィキって概要だけ。ウィキは文責もとらない。教員としては、やっぱりそういうのが問題だと思いますね。
○**山口**　最近の学生は、ネットで調べるくせがついているから、広く浅く調べるということしか知らない。実は僕、英語の統計の論文を読ませようとしたときに、英語の辞書しか引かないんですよ。国語辞典で日本語の専門書を読む、というのと同じレベルじゃないですか。だから、何を調べないといけないかということの理解が違っている。
○**細井**　だから、媒体の問題じゃないんですよね。
○**山口**　そうですね。
○**中島**　ただ、そうやって中学、高校からネットで調べる癖がついていると、そういうものが調べものだと思っているから、深く調べるということを知らないんですよ。

○**細井**　その辺のフォローがちょっとないかな。

○**中島**　つまり、授業というのは、学生に疑問を持ってもらって、自分で考えさせるということが、本当はなきゃいけないんだけど、今はネットがあるから、それですぐ分かってしまう。宿題やれといっても、家に帰るとネットがあるから、何も考えもせずに答案が書けてしまう、宿題も全部できてしまう。考えるということなしで、中学、高校と進んできているから、調べものと言えば、ネットから持ってくるんだと思っている。ネットがなければ、それこそ『広辞苑』とか『英和辞典』とかだけになってしまって、そこから先に何かあるっていうことが想像できない。

それがネット社会の学生の一つのデメリット。答えはもう用意されている。そういう問題が出てきちゃっているのかな。これはパソコンというより、ネット社会になったせいで、学習というものが変わってきている。

だから、我々の授業も、ウィキで調べて、しゃべりまくってなんていう軽薄な授業に、特に僕なんかなっちゃっているかもしれないということはあるかもしれません。

Ⅲ.「分かりやすい」授業―考える力

○**山口**　ネットのせいなのか、今は分かりやすい授業が求められているように思います。僕は、本当は分かりやすい授業というのがいい授業だとは全然思わない。次に何か勉強したいと思う授業でないといけないんだと思うんです。でもネットの影響なのか、我々大学にいる人間からすると、高校までの、いわゆる大学に入るための勉強はある種、答えがある問題、答えがはっきりしている問題、きちんと解ける問題にチャレンジして、点数を取れる勉強というように、特に受験のときはなっていて、そちらの弊害もちょっとあるんじゃないかなという気もするんですけど、その辺は、佐藤先生がお感じになっていることはありますか。

○**佐藤**　いわゆる受験勉強とかで、正解が決まっているものを学んで大学に入ってくるという点で言えば、我々の学生時代も同じですね。道具としてネットというのは、僕らが大学に入ったころにはなかったものですから、またそれは違うことになるような気がします。

○**細井**　でも、変わったと思いませんか。学生のアンケートに、板書がよく分からないからきれいに書いてくれとかあったりすると、一口ずつに切って口の中に入れてあげなきゃ食べられないのかという感じになります。全然わけの分からない授業とかあったじゃないですか。先生だけが一人で勝手にどんどんやっている授業とか、いきなり難しいことをやっちゃう授業とか。そうすると、学生が自分でそれをどうやって食べようかっていうところがあったんだけど、今はそういうのをやると総攻撃を受ける。もっと分かりやすく、ちゃんと料理して、柔らかくして出してあげてくださいね、みたいなのが普通になっちゃったので、そういう意味では、教え方とか、どこで学ぶ楽しさを味わえるのかとか、こっちが考えなきゃいけないのかもしれないですよね。

○**山口**　僕らが大学生のときって、90分聞いていて一言も分からない授業があった。

○**中島**　先生が自分の書いた論文を持ってきて、そのまま読んだりしていた。

○**細井**　全然レベルの違うものやっていたりね。

○**山口**　そういうものがいいかどうかはまた別の話があるんだけど、ただ、そういうのを聞くことで、もっと何か自分でしっかり勉強しなくてはいけないという

思いは持ったので、そういう意味では役には立ったと思うんだけども。

○**佐藤**　ただ、僕は今のその話は極端な例だという気がして、昔はそれでもいいと思われていたというのが今と違うかもしれないけど、だからといってやっぱり、我々の時代から、わけの分からない授業はわけが分からなかったので、やっぱりそうじゃなくて、要は、聞いた側がその説明を自分の言葉で置き換えて、自分のための説明し直しのような、自分でアレンジして、ノートに書いていくという作業というのをせずに、もうそのままノートに書ける形で書いてくれという、そこの問題だと思います。人の話を聞いたり、本を読んだときだってそうですよね。一字一句そのままじゃなくて、書いてあることを自分なりの理解で置き換えて、理解した内容について、自分で人に説明するためには、自分の言葉で一回言い換えのようなことがなきゃいけないですよね。そういう勉強の仕方、あるいは情報の受け取り方の指導というのをどういうかたちでやっていくかという話だと思うんです。

○**細井**　極端なんだけど、その食べ方を自分で工夫して食べたときの喜びってすごかったじゃないですか。ああ、やっと分かった、みたいな。でも、今はそういう喜びがないかたちで、ただ提供しちゃっているので。

○**中島**　飢餓感がないんだ。調べれば分かっていると思っているから、授業中に質問もしないんだよ。

○**山口**　受験勉強の中で気になっているのは、分からない問題はとりあえず捨てるという訓練があって、実は、それは大学ではやってはいけないことだと思います。最後までチャレンジして、どれだけ時間がかかっても頑張るというところが重要なのかなと。そういう意味で言うと、少し回り道しながらも、単純にネットだけではなくて、図書館でいろいろ調べるというのは重要だという気がしています。

○**落合**　それにちょっと近いと思うんですけど、こういうことって勉強の場だけじゃないと思うんですよ。自分で考えようとしないということに関しては、大学で生活していて、例えば、新しく何かを始めようというとき、僕が、「○○やらないか？」と言うじゃないですか。それに対して、こうしたらいいんじゃないの、とか提案するんじゃなくて、全部、どうするの、みたいなことがある。とにかく人に頼って、自分では全く考えようとしない人が多いなと感じています。考えない学生が多いというのは、自分も最近感じているところです。自分もそうなのかもしれないですけど。

○**中島**　便利になりすぎて、自分で考えない。

○**山口**　経営学部の導入教育は何をやっているかというと、みんなで一緒にやるということと、提案をさせること、勉強の仕方の前にそれをやらせているんですよ。1つは、消費者だと思うな、クリエーターになれ。それを1年の最初にやっているんですよ。それでないと、大学の学びは始まらない。消費者だと思って大学に来てもらっても、大学の本当の学びはできないよということを最初にとにかく教えたいというのが経営学部の基礎演習なんですよ。

　だから、受け身で先生の言うことを聞いて、ネットに書いてあることを調べれば分かるということでは、たぶん大学で学んでいることにはならない。

○**落合**　今、ちょうどそういう教育を受けていて、それが2年目になったんですけど、さっき山口先生がおっしゃっていた受験の弊害というのを自分は今ちょっと感じ始めているときです。どういうことかというと、受験のときは、

落合　敏彰

確かにルールの中に答えはあったんです。だから、自分の中でこうじゃなきゃいけないというのを最初に思ってしまうくせがついてしまっていて、でも、大学だったら、こうじゃなきゃいけないというのは特になくて、自分でいろいろな方法を駆使してたどり着かなきゃいけないわけじゃないですか。なのに、最初に課題が出たときに、こうやってやるのが正しいんだっていうのが自分の中にあるので、つまらない答えしか書けない自分に最近気づき始めたんです。

なので、ルールの中でしか生きられない、最近それを打破しようとしているんですけど、そういう人間ができやすいのが受験勉強であったり、中学や高校での教育の弱点じゃないかと思うこともあります。

○**柳**　その意見はすごく同感です。考えるのが少なくなったのはまさにそうなんですけど、考えるというより、答えを探そうとしちゃうんですよ。例えば、私はゼミに所属しているんですけど、ゼミですごく難しい言葉が飛び交っていて、後輩を見ているとスマホで調べているんですよ。質問して「これってどういう意味ですか」と聞けばいいのを、ゼミ中に調べちゃうのはすごくもったいないことじゃないですか。だから、きっと答えをきれいにしなきゃいけないというのが、模範解答が世の中にあふれていて、それを見てしまうからだと思います。自分の意見を言うのは不安なんだと思います。

○**渡辺**　うちの学部は、ディスカッションとかをするときに話が止まらないんです。ディスカッションの流れを止めるな、みたいなのがあって、思ったことは必ず口にして、分からないことはそこで聞いて、そこで解決しようという姿勢をみんな持っているように私は感じています。特に私は留学を終えて帰ってきてから、その姿勢がもっと強くなったと感じているんです。今、他学部の方とかかわることがほとんどないので、どういう状況かというのを聞いて、ああ、そうなんだという感じだったんですけど。やっぱり海外に出た経験を持っている人たちって、日本人みたいに待っていたら何も動かないんだよということを身をもって経験してくると思うんです。分からないことは聞くし、自分で言いたいことは言うし、それに対して相手に聞かれれば、ちゃんと自分も説明しようとするし、という意味でのコミュニケーションを図ろうとすると思うんです。うちの学部の授業においては、たぶん模範解答ってないんですね。ひとりひとりが違う意見を持っていて、ひとりひとりが違う見方をしているから、人の意見を聞いて、ああ、そういう見方ってあったよねっていうふうに、どんどん広がっていく学部だと3年間在籍して感じています。

柳　真利奈

○**細井**　異文化コミュ

ニケーション学部の基礎演習はそこに特化していますので。

○**渡辺**　1年生の最初の基礎演習で、私はじゃんけんに勝ったのに、先生に「勝ったんだったら司会やって」と言われて、初回に司会をすることになったんです。入学して、ディスカッションの仕方も分からないので、先生に、どうすればいいですかって聞いたら、先生が、「大学は、先生にどうすればいいですかと聞くんじゃなくて、自分で考えて行動するところだから、あなたが考えたようにやってください」って言われてしまって。

○**細井**　新入生のときですよね。

○**渡辺**　はい。基礎演習で。それで、すごくパニックになってしまって、十何人ものディスカッションをまとめるなんて、どうしていいか分からなかったんですけど、帰国子女も多い学部なので、そういう子たちが積極的に発言してくれて、じゃあ、これはそういうふうにまとめていっていいですか、みたいな感じで進んだんです。そのときから、先生たちに頼るんじゃなくて、自分で考えて動かないといけないと思うようになりました。本当に困ったときだけ、先生に相談をするという習慣が、基礎演習でついたと思います。

○**中島**　何か先生が褒められているような。要するに、大学って学生をさまよわせるところで、さまよってもらって、その間に自己形成してもらうんですね。ネットがあるとさまよわないで、答えを見つけて、ふっと抜け出ていっちゃうという感じになる。

○**細井**　便利すぎてね。満足しちゃうんだよね。

○**中島**　答えが見つかるから。

○**山口**　それを答えだと思うからいけないんですよ。それを答えだと思わなければいい。

○**佐藤**　それを契機に、ネットならネットの中でもっとさまよえばいいんですよ。

○**中島**　そこが考え方がいろいろ分かれるところで、そういう害があるからネットは使わせないという見方もあるし、ネットをもう徹底的に使いたおして、その底の浅さを実感したら、本当にどういうふうにさまようべきかって分かるだろうからという考え方もあるわけですね。だから、勧める場合と、禁止する場合と出てくるということなんでしょうけどね。

○**佐藤**　今、自分でものを考えるという話をずっとしていたんですけど、さっきのウィキの話に戻します。要するに、1つのもので安易に、手っ取り早く調べられるところで、それしか調べない。『広辞苑』の例も出してもらいましたけど、問題は2つに分けて考えることができる気がしています。ひとつはそういう画一的な調べ方しかしないという点で、それは『広辞苑』も同じですよね。何を調べて何について述べるかにもよりますけども、例えば、ある概念によって、とりあえず一般的に日本語ではどのような意味の言葉とされているかということを一応、確認で言わなくてはいけないときに、『広辞苑』のような権威ある辞書から引いてくるという、そこの部分自体は分かる。それ自体は悪くないんです。

　何が言いたいかというと、2つ目は、一番単純、手っ取り早いものを調べる、調べないという問題とは別に、今度は、自分が見た情報源に対する批判力の問題。つまり、これだけ簡単にいろいろな情報に触れられるからこそ、この情報はどのくらい信頼できるものかとか、どういう人がどういう立場で責任を持って提供している情報なのかといったようなことをきちんと見抜きながら、利用できるものはしていくというような姿勢。むしろ、インターネットがあ

ることによって、ちゃんと利用すればそういう能力を高めるチャンスでもあると思うんです。図書館にある本だったら、基本的に、世間的には信頼できる本という感覚があるかもしれない。だけど、じゃあ本だけ見ていなさいと言えば、逆にそれは違った意味で安易な姿勢にもなり得る。インターネットでも必要があったら調べてごらんなさい、ただし、うのみにはするなと。情報に触れたときに、この情報源はどういう問題点がありそうかとか、そういったことを自分できちんと考えながら、使える情報を使いこなしなさいというようなことができれば、むしろそういった批判力を高めるとかいうことにつながるんじゃないですか。

○**細井**　だから、こういうときはこのタイプ、こういうときはこのタイプっていうのを、もうちょっとはっきり示さなきゃいけないわけですね。

○**山口**　示すというか、逆に言うと、いろいろなことを経験することで、さっき図書館の話をしたんですけど、例えば、もう大学院レベルになって、研究計画書を書くときに、新書版しか読んでいない学生とかをみると、専門書を読みなさいって言いたくなりませんか。

○**細井**　ありますよね。

○**山口**　それと一緒で、本だったらいいっていうわけでも当然なくて。

○**細井**　本だからといって信頼できないですから。

○**佐藤**　あと、目的に応じて、本当に適切な情報源なのかとか、そういったところをきちんと考えられるようにする。

○**中島**　そこまでいければいいんだよね。これが本当の使い方だって、そこにうまく導ければ、ネットも大いに使える。

○**佐藤**　ウィキを使ってもらって、その使って出てきたものを、じゃああなた、これはウィキを使ったらこういうことが書いてあって、あなたはそういうふうに信じてこういうふうに書いたけど、実はこういうところが問題なんじゃないのっていうようなことが、もっとちゃんとできればよくて、ウィキはとにかくだめだよっていうのが、本当にいいかどうかは分からないですよね。

○**細井**　分からない。ウィキだっていいようなこともあるわけですし。調べたい深度によってはね。だから、別に使うなとは思わないけれども。

○**山口**　そういう意味でいうと、特にネットの場合に、情報がたくさん入ってくるというときの批判力をどうきちんと形成するか。そのための教育は結構、重要だということですね。

○**細井**　そうですね。どうしたらいいのでしょう。

○**中島**　そういうことは考えたことがありますか。ネットからいろいろなソースが入ってきて、それが本当かというようなことを判断する基準とか。

○**柳**　あります。今、論文を書いているんですけど、ネット上にはいろいろな論文があふれていて、正直、使い方に困るときがあるんです。どの説が正しくて、どれがどうなのか。最終的には自分の意見を述べるしかないんですけれども、それをまず体系化するのも難しいし、それにどう自分の意見を結び付けるかも難しいし。それは、自分のやり方でしかないので、論文を書くにあたってちょっと混乱していますね。

○**中島**　情報が多すぎてね。今、卒論を書くと、確かにそうだろうね。

○**落合**　学部だとディベートをやる事があるんですけど、データをネットから持ってくるときに、同じことについて調べたグラフなのに、資料によって数値が違っているということがしょっちゅうあって、どっちを信じたらいいんだろう、と思うことがありました。

○**中島**　そうなんだよね。だから、そういういろいろな情報があふれていて、

どれが自分のとるべき情報なのかということを、迷うということは自分のほうがしっかりしていなければならないということですよね。そこに気がつくということが大事です。そういうふうに、自分が解くべき問題を自分でかっちり立てられたら、それで卒論なんていうのはもう8割できたようなもので、そこまでたどり着くのが大変ですよ。

○**山口**　逆に言うと今の若い人たちは余計大変ですよね。我々のときはもう、図書館に行って調べるしかない、みたいな。

○**中島**　そういうことから言うと、パソコンの前に行けば情報があふれているし、それがもうスマホというかたちで手元まで来てしまっている。だから、思いついたときは何でも調べられるという状況にあるということは、一面すごく便利なんだけど、逆の立場から言うと、これは地獄と言うのかな。何でも分かってしまうというのは、一体どういう世界なんだろうって。そこで自分の頭をどういうふうに使っていいのかという深刻な状況になるんですね。そういうことを我々は積極的に言ったほうがいいのかな、どうなんでしょうか。

○**山口**　たぶん、批判力というのをどう鍛えていくかということがやっぱり一番大切で、ツールとしては、情報を得るためのツールはたくさんあって、そこで取捨選択をどうするか。そのときのよしあし。それがおのおのの判断力、いろいろな決断をしていくところの鍵を握っているような気がします。

○**細井**　しかも、それは紙でもネットでも一緒なんだと思います。

○**山口**　例えば、新聞が言っていることとか、マスコミが言っていることについての批判をどう持てるかということが、我々のときはまだ新聞とかマスコミだけしかなかったから、そういうのをちゃんと批判的に見られるかどう

か、いいところはいいというのをちゃんと見られるかどうかというところが、大切ですね。

○**中島**　少なかったからじっくり読んだんですよ。コピーもなかったときは手で写したんですよ。手で写すのは限られているから、ちゃんと読んで、こことここが大事と、読む過程でも選ばなきゃいけなかった。だから読みが深かったんですよ。今はコピーがあるから、コピーを持っていると自分の頭に入ったような気がして。僕なんかもそうだけども、コピーばかりどんどんたまって、本当は全然読んでいないとか。そういうように、だんだん研究者も堕落してきて、学生はもっと、その辺が便利になっちゃっていて、宿題なんかすぐできちゃう。

○**細井**　情報源って調べるじゃないですか。私たちの時代は、情報源ってすぐ分かるっていうか、今は情報源がよく分からない情報が多いから、それの信憑性を調べるというのはものすごく難しくなっています。そこの差じゃないかな。書籍にしても新聞にしても、割合に調べやすかったよね。そういう技はどういうふうに育てていったらいいんだろう。

○**中島**　学生がどういう状況にあるかっていうことを、教師の側があまり知らなくて。昔の感覚でやっちゃうから、そこにずれが生じるというのが大きいのかもしれないです。

○**細井**　私も、信憑性とかきちんと確認しないまま持ってくると、きみが悪いって、個人的な責任にしちゃっているところがあるかな。
○**中島**　今、全カリで時々あるんですよ。すごくいいレポートだといい成績をつけちゃったんだけど、あとで調べたら、ネットにそのまま載っていたということで、どうしたらいいでしょうかって僕に聞いてくるんですね。そんなことは聞くなよって答えています。ちょっといいレポートが来たら、これはネットにあるんじゃないかと疑うのが当たり前だという。
　最近は、そういうのを調べるソフトがちゃんとできているよね。教員も使っているから、かなりの頻度で。「てにをは」を変えたぐらいだったら、即、元が分かるような仕掛けにはなっているんだけどね。

Ⅳ．立教大学の学習環境 ―CHORUS、Blackboard、ポートフォリオ

○**中島**　一般的な環境に加えて、立教大学で特にどうかということも聞きたいんですけどね。たとえばCHORUSってあるけど、あれでレポートを出したり、質問をしたことはありますか。
○**渡辺**　質問やレポートはないですけど、資料を引っ張り出してくるということはあります。
○**中島**　あそこに置いてあるのを持ってくるという、大体、今の教員はそれぐらいの使い方ですか。
○**山口**　科目によるんじゃないですか。私は、小テストはあれでやったり、レポートはもうほとんど。私は今、講義を持っていないんですけど、ゼミのレポートやプレゼンは全部CHORUSで出させています。
○**中島**　小テスト。あれでテストができるんですか。
○**山口**　できます。
○**中島**　個人IDが入っているからですか。
○**山口**　はい。
○**中島**　でも、アイデンティファイできないじゃないですか。
○**山口**　できます。
○**中島**　本当にその人間がやっているかどうか確認できますか。
○**山口**　それは小テストといっても成績に反映させるものじゃないので、そういう使い方をします。教員側からの立場で言うと、理解しているかどうかのチェックにはものすごく役に立つ。
○**中島**　そうか。学生諸君に、自分が理解しているかどうかをそれでチェックしてもらうという使い方ですね。
○**山口**　今、かなりの科目でCHORUSを使っているようです。学部によって違うのかもしれませんが。
○**落合**　僕らの講義では一回も使っていないです。去年は使いましたけど、Blackboardとポートフォリオはよく使います。
○**佐藤**　CHORUSはあまり使われていないんだ。
○**山口**　メディアセンターの調査によると、意外と兼任の先生のほうが使っていて、専任が使っていない。だから、全カリは使用頻度が高いんですよ。
○**細井**　全カリはそうでしょうね。
○**柳**　全カリは確かに使います。
○**中島**　レポート提出ですよね、やっぱり使い方とてしては。
○**山口**　それと、英語はほとんどCHORUSですよね。
○**落合**　僕は手渡しでした。
○**山口**　今は違うの？　昔、CHORUSを導入するときに、全学生が1回は使うという理由が、全カリの必修で使っているからということになっていたんだけど。
○**中島**　それは崩れちゃっているよう

ですね。あれはやっぱり型が決まっているから、必ずしも使い勝手がいいとは言えなくて。僕も提出物は、CHORUS ではなくてもっぱら自分のサイトを使っているんですよね。

○**山口**　うちの教員も実はそうだったんですけど、今は、学部としてはできるだけ CHORUS や Blackboard を使っている。学生から見たときに、科目ごとに別のページに行かないといけないというのは、ちょっと問題かなということになったのです。

○**中島**　その科目の登録が反映された時点から使えるようになるので、学期の初めは使えないんですよね。それで使わなかったんですけどね。

○**山口**　いや、それは、今は科目によってはもう最初から使用するということをお願いできるようになったと思います。結構、経済の先生とかからも、実は教務のところに要請が来ていて、学期初めからとか、レポートの返信ができるように、コメントを返せるようにということで、そういう工夫は少しずつしているかなと思うんですけど。

○**細井**　中国語はかなり CHORUS を使っていますよ。

○**中島**　そうですか。提出物を出させるときですか。

○**細井**　先生がたくさんいらっしゃるので、いろいろな教授法があって、先生によって副教材の活用も異なるので、副教材を自習用教材に加工して、全員が見られる拡大クラスをつくってもらって、そこに掲載します。

○**山口**　もともと CHORUS の発想は、自習用なんですよね。

○**細井**　そうですよね。

○**山口**　CHORUS は、自習用で、Blackboard とはちょっと違って、どっちかというと授業支援システムという、マネジメントのためのシステムではなくて、自宅学習システムに近いものなんです。

○**落合**　僕は Blackboard を自宅学習用に使っていました。

○**細井**　Blackboard って何ですか。経営学部用のものですか。

○**山口**　これは全学的に入っているんですよ。

○**細井**　知らないです、初めて聞きました。

○**柳**　初めて聞きました。

○**細井**　それはどういうものですか。

○**山口**　LMS の 1 つで、たぶん世界的に言うと、Blackboard が一番シェアは高いと思います。CHORUS は日立がつくっている日本ローカルの仕組みで、Blackboard をもともとつくったのはアメリカの会社ですが、アメリカのほとんどの大学にはたぶん入っていると思います。

○**細井**　それは立教の V-Campus に入っていますか。

○**山口**　入っています。

○**細井**　全然使ったことがない。

○**山口**　ここで愚痴を言っても仕方がないんだけど、インターフェースが、まだあまりきちんとしていなくて、立教の方針は、CHORUS から Blackboard に変えるという方向性でちょっとだけ考えていたんですよ。導入の数年後には CHORUS ではなくて Blackboard にしようと。両方入れると相当お金がかかりますから。ところが、CHORUS のユーザーがかなりいるということで、CHORUS は CHORUS で残しながら、Blackboard は少し、試験的に使い続けようと。

○**細井**　機能は一緒なんですか。

○**山口**　いや、Blackboard のほうがはるかに上ですよ。ただ、Blackboard はもともと日本製じゃないので、英語で表示されています。インターフェースは変えられると思うんですけど、たぶん中国語版もあると思います。

○**細井**　あるんですか？

○**山口**　間違いなく。中国の大学でも使っているはずなので。それで、CHORUS が英語に対応していない…、今はしているのかな。だから、英語の先生方から CHORUS の英語化を要請されていて、それができなかったので。今、経営で Blackboard を使っているのは英語の科目でしょう？
○**落合**　International Business とか。
○**中島**　そうなのか。要するに、簡単に言うと、双方向で情報が、やりとりできるんですよね。
○**山口**　はい。あとは、学習履歴等を残せたりというのが、たぶん機能的には CHORUS より上だと思います。
○**細井**　見てみます。
○**中島**　ということで、その辺はまだ開発途上なんだね。教員もあまり知らない。
○**山口**　あと、せっかくなので、経営の宣伝じゃないですけど、学習環境で言うと、うちはポートフォリオ、経済はアナログじゃないですか。冊子をつくられましたよね。あれの電子版を数年前から、文科省の GP もらって開発していて、一部のプロジェクトの科目では使っているんですよ。
○**落合**　ポートフォリオは、ＢＬＰ、Business Leadership Program でよく使います。リーダーシップは何かということについて考えるプログラムなんですけど、毎回課題が出るんですが、その課題は全部ポートフォリオという場所に提出します。そうすると、後で自分でも見られるし、教員が見て、例えばワードの場合だったらコメントを書いてくれるんですよ。それをためておくことによって、数年後も見られて、自分がどういう学習をしてきたかというのが、埋蔵箱のようにどんどん積み重ねていけるんです。それをあとで確認することによって、自分はああいうときにこんなことを考えていたんだ、と思いながら、過去を振り返り、今を見るということで、学習にとてもよく使えます。
○**中島**　そういうのは、今のところ経営だけですか。
○**山口**　経営の全部の科目で使われているわけじゃないです。実は CHORUS も、過去のレポートは全部見られるんです。ゼミ生に、去年、「このレポートを出していたよね」と聞いたら、「そんなもの今もう持っていません」と言ったので、CHORUS で、去年出したレポートなどは残っているので、全部見られると指示しました。だから、そういう使い方自体を CHORUS もできるので、もうちょっと活用すればいろいろなことができる。
○**細井**　CHORUS って履修登録した学生だけに開示じゃなくて、履修し終わった学生の情報も見られるんですか。
○**山口**　いえいえ。でも、本人が出した分は全部見られますよ。
○**細井**　ああ、そうか。教員側からは見えないけど。
○**山口**　教員側からは、自分が担当した科目は見られますよ。ポートフォリオの場合、教員は、例えば許可された学生の分は全部見られる。だから、過去の学習履歴がどうかというのも見られる。
　今、実は試験的にやっているのは、就活のときに企業に見せるという試みです。自分が勉強した履歴がここに残っているから見て欲しいということで、学生が教えれば、企業の人が見られるという仕組みまではできあがっています。
○**中島**　就活に有利ですね。
○**山口**　就活を変えるという意味では、やりたいなというのがあって。企業の人にしっかり見てほしいという意思表示です。これは実は「立教時間」にも似てますね。

○**細井**　でも、「立教時間」は教員がコメントとか書けないでしょう。
○**山口**　はい。あれは学生が書いたことだけですね。
○**細井**　そうですよね、学生だけですよね。あれの改善版なんですね。
○**中島**　そういう必要な機能がだんだん備わってきた。
○**細井**　こういうのがあると、自分でちゃんと自分の大学生活をデザインできるというところがいいですよね。
○**山口**　我々だって、昔で言うと、ノートをとりあえず持っていた。それが電子化されただけだとは思うんです。検索して見やすくはなるけど。
○**細井**　昔のノートは、教授は見ない。自分でこそこそ書いているだけ。
○**中島**　ネットというと、ひと昔前は裏サイトというものがあって、あの教員は単位がゆるいという情報交換とか、ノートの貸し借りみたいなものがだんだんネットに移ってくるということも。でも、それをプラスにとらえて、自分の履歴をためておいたり、お互いに情報交換し合ったりできるような環境になりつつある。そういうのが情報端末、例えば、スマホに入ってくるというふうになってくると、学習ツールといっても、これは相当大きな話になってきますね。
○**山口**　立教の環境を今話しているんだけど、たぶん、皆さんはほかの大学に高校の同級生がいると思うんだけど、その人たちの大学の環境と、立教の環境とを比べたことはありますか。立教は、V-Campus をスタートしたっていうことで言うと、かなり先駆け的に進めたんです。
○**中島**　キャンパスが狭いからね、かなり早くできた。
○**山口**　ただ、パソコンの台数とかいうと、実は同規模のところと比べると、一時期は少なかった。4 年生の人が 1 年生のときは貸出パソコンはなかったでしょ。
○**柳**　なかったですね。
○**山口**　なかったでしょ。PC 貸出をスタートしたのは最近なので、1・2 年は当たり前だと思っているかもしれないけど。そういう工夫をしているんですけど、他の大学の様子と何か比較したことはありますか。
○**柳**　大学の図書館でパソコンを貸し出せて、しかも、それを外にも持ち出せる。あと、印刷も一程数は無料でできるという話をすると、ほかの大学の人には「うらやましいな」と言われます。ただ、CHORUS とか、ああいうシステムに関しては、正直、話したことがないので分からないです。
○**落合**　僕がこの前びっくりしたのは、他大に通っている友人が大学から与付されているアドレスを持っていることすら知らなかったというので、大学でいろいろと環境を整えていても活用していないんじゃないかと思いました。
○**中島**　その大学では、自分の ID を知らない。
○**落合**　その友人が使っていないということです。
○**山口**　出席者の登録は、それがないとできないんじゃないの。
○**中島**　理系では、使っているものが高度で個人のパソコンに入らないから、教室だけでやらせているっていうことがありますよね。私の息子も理系ですけど、家ではできなくて、教室に行かないとできないです。それはやっぱり大学のポリシーというものが、ある程度あるかもしれないです。教室だけでやらせるというような考え方もありますから。一方で立教の場合は無線 LAN の導入も早かったし。
○**渡辺**　私は他大の友達と、CHORUS について話したことはないです。ただ成績について、今はネットで確認でき

るようになりましたが、私が2年生になるまでは、郵便で来るまで分からなかったことを友達に言ったら、「えっ、遅くない？」と。ほかの大学に通う友人からは、「普通にパソコンで確認できるよ」って言われました。私は、立教ってそういうネット環境は遅い大学だと思っていたんですけど、先生のお話を聞くと、進んでいたんですね。

○**山口**　例えば、他大学だと、もう4、5年前から成績は全部ウェブで、自動的に学生に通知が行くようになっている大学もある。立教はつい最近まで、履修登録も紙でしたよね。最初からウェブでしたか。

○**中島**　全部じゃないよね。

○**渡辺**　私はネットだったと思います。

○**中島**　今、ネットになったんですか。

○**山口**　今、全部ネットですよ。

○**柳**　1年生のとき、届出用紙がありましたね。

○**山口**　少しずつ移行していったんです。

○**中島**　立教の場合、日課表はウェブ上にpdfファイルが貼りつけられているだけで、そこをクリックしてもシラバスにいかないんですよね。あれは使いづらいよね。

○**事務**　全カリではスポーツ実習を除く総合科目はアクセスできます。言語科目はアクセスできませんが。

○**中島**　その辺は、もうじりじりとやっていくしかない。立教はほかの大学よりカリキュラムが複雑だから。全カリがあるということも、ちょっと特色があるし、また学部によって方式が違ったり、その辺の調整がなかなか、あるもので。ほかの大学みたいにすっとはいっていないという。それでご不便をかけていますけれども。

○**山口**　今、例えば、学習ツールの1つでシラバスがあります。あれは全部ウェブで見られるようになっているんですけど、ああいうものは使っていますか。

○**渡辺**　使っていないです。見づらいじゃないですか。

○**山口**　見づらいね。

○**渡辺**　紙のほうがいいです。

○**中島**　ウェブ時間割からアクセスできないから、結局、索引で見るほうが早いんですよ。

○**山口**　実は、あの紙をなくそうかという提案があります。『講義内容』は残すんだけど、『履修要項』はなくそうかという話があります。『履修要項』はあまりいらないでしょ。

○**渡辺**　『履修要項』、見ています。

○**山口**　よかった、見ているんだ。『講義内容』と『履修要項』と2つ分かれていますけど、『講義内容』の方は、紙媒体でずっと残ると思いますけど、規則が書いてある方（『履修要項』）の紙媒体は必要ですか。

○**渡辺**　両方必要ですよね。

○**山口**　1年生のときだけ配れば十分じゃないかな。あれは毎年配っているでしょ。

○**渡辺**　はい。でも、私、留学から帰ってきてから、履修登録の方法を忘れてしまって、私の学部の学生はみんなあれ見ないと分からないねって、みんなで必死に開いて調べました。留学で、長期日本を離れた学生って忘れちゃうと思うんですよ。だから、なくなったら困ります。

○**中島**　やっぱりウェブだと自分の欲しい情報が相当深いところにあったりして。

○**渡辺**　探しづらいですし。

○**中島**　そういうことがあるんだ。やっぱりそういう点でも考えたほうがいい。シラバスも、ネットだとたくさん書けるでしょ。だからネットにしてはどうかという人もいるんだけど。

○**山口**　そういう意味で言うと、立教

のシラバス、日本の大学のシラバスが概してそうなんだけど、内容が書いていない。例えば、1コマ分について何をやるかということは、出てみないと分からない。だから、そういうのがネットの上のシラバスになると、1回1回をもうちょっと詳しく書ける。

○**中島**　書こうと思えばね。そういうのを書くのが堕落だと考えている先生もたくさんいる。

○**山口**　それはいろいろあるので、基本的にそこで学生とインタラクティブにやることが大切な科目も学部によっては当然ある。

○**柳**　立教の履修登録の仕方は、私はすごくいいなと思っています。紙でもあるし、あとは、お試し期間が一応あるじゃないですか。

○**山口**　あれはお試し期間というのではなくて、履修の変更を許可している期間です。

○**柳**　そこで最初に詳しくお話をしてくださるので。

○**山口**　学部によって違うのかな。多少古いやり方が残っているかもしれないですね。昔は通年科目だったから最初の2週間はもう全然、登録もなしに、自由に出入り。3週目ぐらいから、ちゃんとした授業をしていた。3週目に履修登録をしていたので。でもそれは通年科目だったからできたことですね。

V．学習ツールとしての携帯電話・スマートフォン・SNS

○**山口**　こういう情報機器を使いこなすということは特に経営学部では大切にされていますが、あとは、当然、人と人の接触、コミュニケーションということの方をより大切にしている学部もありますよね。それは、たぶんどこの学部も一緒なのかもしれないですけど。

○**中島**　授業中に携帯、スマホを許可するかどうかというのも、恐らく学部とか、あるいは科目によって相当やり方が違っていて、僕なんかゼミではヨーロッパの現代のことをやっているわけですよね。そうするともう、紙媒体だと全然間に合わないわけです。だから、その場でもってすぐスマホで調べさせてということは頻繁にあります。それは仕方がないですよね。なければできないんだから。そうでないところで、授業中にスマホというのは、さっき言ったように、やっぱり功罪があるわけです。

○**山口**　授業中に気づいた中で、気になったのは、スマホでノートをとっている学生がいて。それはやったことないですか。

○**柳**　ないです。

○**細井**　どうやるのかな。

○**山口**　僕らと違うから、ちゃんと打てるの。

○**細井**　すぐに黒板に書いてあることを写真に撮っているのよね。

○**中島**　そうそうそう。「先生、ちょっと消すの待ってください」と言って、スマホで写真を撮っている。1、2年はだんだんそういうかたちになってきちゃっていますね。

○**山口**　僕らは、最初にスマホが出る前のイメージは、もう全員がパソコン、例えば、8号館の教室があるでしょ。たぶんああいうところでノートの代わりにパソコンで入力してというふうになるのかなと思っていたら、スマホの時代になったので、スマホがノートになった。そういう学生ってまわりにいないですか。

○**落合**　僕は授業ではスマートフォンでノートをとったことはないですけど、この前、人の話を聞いているときに、どうしても書くものがなくて、ちょっといいですかと言って、スマートフォ

ンで重要なことはメモさせてもらったことはありました。でも、最近、iPadを持っている友人はいます。
○**山口**　それも増えてきそうな気がするんだけど。
○**中島**　今日も教授会で、使ってる人いましたね。
○**細井**　あれ便利そうだよね。私も使いたいな。
○**中島**　その場で書類つくれるし。
○**山口**　ただ、教員の中には、そういうものを授業中に持ち出すのは禁止という人もいる。禁止している理由は、他のことに使う可能性があるからでしょ。
○**細井**　そうですね。携帯、スマホにダウンロードしたものを禁止しているのは、小テストが成績評価に含まれているからです。不正行為を防ぐために禁止にしているので、別に入っていなければいいんですよ。授業中にノートをとるとかは問題ない。
○**山口**　慶應大学では実質的には使われなくなったんですけど、クリッカーを入れるときにそういう話が出ました。
○**柳**　クリッカーって何ですか。
○**落合**　賛成、反対とかの投票をするものです。
○**中島**　機械を学生に渡して、ボタンを押させるんです。
○**山口**　大人数のクラスで、小テストをやるときに使用したり、理解しているかどうかその場で聞いたりする。実は、クリッカーを導入する前に、携帯でそういうのをやるというのを部長会で承認してもらおうと、私はいろいろ演説したんです。一部の学部からは、携帯はもう授業中に絶対禁止なので、それはできませんと。授業評価アンケートを携帯でやるという実験も一回やったんです。
○**中島**　僕も参加しました。
○**山口**　ただ、使い方以前に、大学で携帯の学習ツールとしての使用を断念したのは、一部の教室は電波が届いていないということがありました。
○**中島**　それは今改善されてますか。
○**山口**　まだ、11号館の地下とかは入らない。それについては、立教で導入すると相当お金がかかるんですよ。それで、2年前ぐらいにクリッカーを導入して、大人数でそういうことをやろうとするときの対策をすることになったんです。
○**中島**　簡単な問いをかけて、イエスかノーかというようなやり方だから、あれは限界があったけど、うまく使えば、確かに双方向でインターフェースとしてはいいんだけども、やっぱりどうなんだろう。
○**山口**　だから、大人数のときの学生の私語の問題とかは、あの中で言うと、全員が参加意識を持てるかどうかにかかっている。
○**細井**　そうですね。自分がゲストになっちゃうとだめですね。
○**山口**　そのための道具として、たぶんクリッカーとかは活用しようという話をされていたところがあった。
○**細井**　携帯で出欠をとるという話もなかったですか。
○**山口**　そういうことはチャレンジしたことがあるんですが、まだ成功していない状況です。
○**中島**　今確認したように、学部によって相当文化も違うということがあるんですね。
○**山口**　だから、あとは学生が、逆に言うと、こういう機器を持っていても、きちんと授業に集中して、そのことしかやらないということが確認できれば、全然、禁止するようなものではないはずなんですよね。
○**細井**　そこまで管理するのは難しい。自主性に任せたい。
○**落合**　ニュースで見たんですけど、アメリカの高校はもう全員、ノートパソ

コンで授業を受けていて、授業中に誰が何のページを見ているかというのを、先生が別室で確認できるシステムができているそうです。

○**山口**　8号館にあるPCは、実は学生が何を見ているかということを、見ようと思えば教員が全部見られるんです。それをみんなが知っているかどうかは別ですが。PCの演習しているときに、ネットで何かほかのサイトなどを見ようと思えば見られるでしょう。

○**中島**　本当にスキルの習得という目的の場合にはPCなどの電子ツールは効果があるんだけれど、ここで教えているほとんどの科目というのは、おそらくそうじゃないんですよね。だから、ああいうやり方があまりなじまない。

○**山口**　僕らも授業のときにPCがあったほうが便利で、昔は池袋にコンピュータがないので、わざわざ新座で授業をしていました。1日利用で新座キャンパスへ行っているときに2日利用していたりして。

○**細井**　そういうネガティブなものを管理するという要素が入ってくると、大学の学びからずれていっている感じがどうしてもしちゃいますね。

○**中島**　いわゆる普通の文系の学びというイメージとは相当違うと思います。

○**細井**　かなり違いますよね。

○**中島**　ただ、社会科学全体を見わたすと、そういう要素って増えています。ミクロ経済でも何でも、やっぱりそういうふうにして教える部分というのは、ある程度はあるんです。

○**細井**　自主性とか、そういうところに託しているものっていうのが、どんどん指示だけ出して管理するという方向に、微妙にずれてきたという感じは普段からあるんですけど。

○**中島**　語学でも、やっぱりスキルの習得だけではないという思いが立教の先生は強い。その辺のずれがある。

○**山口**　逆にもう1つは、これはたぶん、あなたたちが社会人になったときは、当然、仕事でスマホとかを使いこなさなきゃいけないし、情報を集めたり、それこそさっきの情報の判断も含めて、適切な情報を探してそれをもってそこで判断しなきゃいけない。当然、使いこなさないといけないので、そういう端末ツールとして習得する機械というのは、今、パソコンのリテラシーみたいな授業があるでしょ。実は教員の側が、スマホの使い方みたいなことを、誰が教えるんだ、と悩んでいる。

○**細井**　分からないからうまくできない。そういうレベルですから。

○**山口**　皆さんはもう基本的に最初から環境としてあって、自然と使う。昔で言うとね、パソコン入門というのは、キーボードの打ち方から練習していたんですよ。

○**中島**　今、君たちはかえってスキルが落ちているかもしれないね。昔はキーボードから授業でやっていたから。

○**山口**　ブラインドタッチの練習とか僕はやったことない。そんなことは最初からやる気がなかったから、自分が担当したときはそういうことは全然なしで、親指でもいいからと。だから、この辺の環境というのは、あまり気にせずに、もう自然と。パソコンは高校で勉強しましたか？

○**渡辺**　ワードとエクセルとパワーポイントをやりました。

○**中島**　情報は必修になっているけど、いわゆる進学校と言われているところほどやっていない。

○**落合**　ほぼ、やらないというか、それほど力は入ってなかったです。

○**山口**　やらなかったからって、困っているわけじゃないでしょ。

○**落合**　大学に入って使うようになったらいつの間にかできるようになりました。

○**山口**　本質的なところというのは、操作ができることじゃないはずで、今で言うと、iPadとかスマホの場合は、インターフェースがしっかりしていて、まわりを見ていればいきなり使えるわけでしょ。昔は電源の入れ方から、何からやりましたよね。
○**中島**　ダブルクリックができないとかね（笑）。
○**山口**　ダブルクリックは本当に大変でしたよ。
○**細井**　パソコンって全然、それまでの時代と世界が違うじゃないですか。だから、初めての道具という感覚だった。
○**中島**　ウインドウズ・パソコンが出てくる前は、自分でベーシックでプログラムを組んでいたんですからね。
○**柳**　ちょっと話はずれるかもしれないんですけど、iPhoneとかiPadは、説明書なしでも、ただ触れば分かるというように設計されているからできると思うんですけど、ただ、他のパソコンの、特にパワーポイント、ワード、エクセルに関しては、大学の授業だけではきっと会社で通用するレベルに持っていくのは難しいんじゃないかなと思います。
○**山口**　ただね、僕は情報の担当をしているんだけど、使い方を覚えるなって言うの。何でかというと、それを覚えたって1年後は違うソフトになるし、使い方が変わるし、インターフェースが変わってしまう。だから、例えば、そのときに使えるようになったプロセスが重要で、習ってその時だけできる、というのでは困る。割と熱心な人って使い方をメモるんだけど、それをやってもあまり意味がないので、だから、そこのプロセスが、これを使えるようになったという経験があれば、1日か2日で使えるようになるはずなんですよね。特に我々の世代はバージョンを変えたくないですよね。
○**中島**　会社に入ったら、そこの環境で勉強をするのが一番いいんですね。どこでも通用するようなスキルというのは、残念ながらない。僕も前の学校のパソコンがアップルで、こっちに来てからウィンドウズになったので、慌ててウィンドウズを覚えたりして。そういう苦労をしなきゃいけなくなる。
○**山口**　少なくともこの辺の環境というのは、皆さんの時代であっても、まだまだ安定した時代にはならないから。
○**中島**　ワードなんて本当、5年ぐらい先にはどうなっているか分からない。
○**山口**　だから、そういう意味でいうと、そういう変化に対応できる力というのをどう身につけるのかなと。実は、僕が大学生のころにパソコンができて、それまでは大型コンピュータで、大型コンピュータは当然、専門の関係で使っていたんですけど。
○**中島**　フォートランとか。
○**山口**　こういうものに関しては、ひとつひとつの使い方を覚えるということはあまり意味がなくて、新しいことが出たときに、そこでどう使えるようになるかということをしっかり身につける。そのプロセスが大切。だから、あとはさっき言っていたように、最近はインターフェースがしっかりしているからね。昔はやっぱりひどかったんだと思うんだけど。
○**細井**　でも、大学って、やっぱりそのスキル面のレベルをアップするということが、究極的な目標じゃないですよね。それを使って何をするかのところにどうしてもいっちゃいますから。だから、やっぱりその程度で止まるしかないですよね。
○**中島**　使って何をするか。まず、我々が使いこなしてですね。
○**細井**　情報への批判力をはぐくむ。
○**中島**　そう。我々がスマホでもiPadでも。使い倒してですね。

○**細井**　私も子どもに習おう。
○**中島**　そうそう、子どもに習ってですね（笑）。
○**山口**　せっかくなのでSNSの活用についても聞きたい。例えば、アメリカではツイッターやフェイスブックとかも、教育できちんと使おうというような動きが一方であって、ただ、我々の実情としては、なかなか。私も両方アカウントを持っているんだけど。全然使っていない。でも、皆さんは、基本的にはもう普通の生活の中で当たり前のように使っているわけでしょ。
○**中島**　「この宿題の答えを教えてください」とぽんと出したら、すぐに答えが来るという（笑）。私のところまで来るんだよね。僕の授業のレジュメは一般のウェブに上げているから、それでサーチで出てきちゃうから、「この問題を教えてください」って。もちろん無視するけれど。ということは、学生同士でしきりにそれをやっているわけよ。そういう時代になると、宿題なんて出すことは意味がないわけでしょ。だから、それも広い意味で学習ツールと言える。
○**山口**　いかがですか。SNSの活用というか。逆に言うと、ほとんどの時間はここにアクセスしている時間じゃないかと僕は思えてくるんだけど、一番気になっているのは、電車に乗っているときとかも、やっぱりほとんどこっちにかかりきりで、人がどう動くかとかいうことを観察している人が減っていて、あと、車内広告も見ていない。人間っていろいろな仕事をしようと思うときに、人がどう動いているかとか、人がどういうことを考えているか、ということを見ながら学ぶことっていっぱいあるんだけど、結構、公共の場にいるはずなのに、周りが見えていなくて、SNSに没頭している人が電車の中とかでも多くいて、駅でもそうだし、歩いているときもそうだしという気がちょっとするんだけど、その辺はどうですか。
○**渡辺**　うちの学部は海外に友達の多い学生が多いので、完全に連絡手段なんですね。これの答えが何ですかとか、そういうような学習的な用途で使ったことは私は一回もなくて、友達がそういうものを書いているのも見たことないし。ただ、語学面の学習という意味では、みんな留学先の友達がいるから、その子たちとその国の言語で話してコミュニケーションを取ることによって、言語能力を維持するという意味での学習ツールとしては、フェイスブックってすごく有効だなと感じるんです。
○**山口**　それは、例えばハングルでもやっている？
○**渡辺**　はい。私はもう完全にハングルです。
○**落合**　僕は台湾に結構友達がいるので、台湾人と英語で話すときに使うのですが、それよりもツイッターを見ていることのほうが多くて。さっき山口先生がおっしゃったように、大体ひまつぶしはツイッターになっているかなと思うんですね。
　でも、人を観察する機会は、確かに減っていると自分も最近感じていて、人の動きは見ないですけど、逆に、人の心理、何を考えているのかというのは、ツイッターで探ることができるようになってきたのかなと思います。

○**山口**　そうか。だから、皆さんにとってはツイッターを一生懸命眺めていることのほうが、もしかすると人の行動をしっかり見ているということになるんだね。
○**落合**　あと、ツイッターでしか募集されない情報があったりして、そのために一応、持っておかないと乗り遅れるという感じがあって。
○**山口**　ツイッターで言うとものすごく僕が思うのは、反応しなければいけないまでの時間が非常に短くなっているということ。僕があなたたちとギャップがあるのは、メール。我々がメールを使い出したころというのは、メールというのはとりあえずためておいて次の日に返事するもの。電話は即座に来るから答えなきゃいけないけど、メールの便利さというのは、ためておいて、ある時間がとれたときに、そこでひとつひとつ答えていく。そういうものがインターネットのメールだった。
　ところが、携帯でメールをやりだしてからそれが一変した。
○**細井**　早くなりましたね。
○**山口**　今、メールってすぐ返すものですよね。
○**落合**　返さないと申し訳ない感じがします。
○**山口**　それが、全然感覚が違いますよね。
○**中島**　だから、僕は携帯を持たない。
○**細井**　結局、相手の都合が分からないときの連絡手段がメール。電話だと分からないでかけちゃって、迷惑をかけるかなと。
○**山口**　僕は学生から時々「深夜にメールしていいですか」と聞かれるんですよ。もう意味が分からなくて。
○**細井**　全然オーケーですよね。
○**山口**　そんなものいつやってもいい。深夜でも全然迷惑ではないから、メールは僕らが好きなときにアクセスするから便利だったのに。今、メールが来たら鳴るわけでしょ。
○**柳**　プライベートのメールはちょっと分からないですけど、私が就職活動中に社会人の方の話を伺ったら、「できる社会人は3時間以内にメールを返信する」って言われたんです。きっとそのような感覚なんだと思うんですよね。
○**中島**　僕らは社会人じゃないから(笑)。
○**山口**　実は言われているのは、例えばメーリングリストで、経営学部の学生に出すメールは、授業中には出すなと。
○**細井**　受け取ったら返事が来ちゃうからですか。
○**山口**　いや、返事じゃなくて、一斉に鳴るから。それを言われて、はっと気づいて。だから、その辺がもう完全に世代のギャップがありますね。
○**佐藤**　今の学生は、授業中に電源をオフにしたりしていないですかね。
○**山口**　うちはたぶんそんなことは言わないので。少なくともマナーモードにはしなさいと言っていると思うんですけど、来たら見るでしょ。
○**落合**　気にはなってしまいます。
○**山口**　だから、そういうのを一斉にやると、授業の妨害になるからと言われて。
○**中島**　全カリだと無理ですね。この間、授業見学をやったんだけれどもね。300人ぐらいいたかな。先生は、「電源を切ってください」と学生に言ったんだけど、僕が観察していたら、後ろのほうはみんなやっていますよ。その辺はもう、まさに文化が違うというのかな。
○**山口**　だから、皆さんにとっては、そういうSNSもメールも含めて、そこから2時間隔離されるというのはやっぱり不安だよね。
○**渡辺**　人とのつながりが切れるような気になる。
○**山口**　気がするんだよね。
○**渡辺**　例えば、自分がメールを出して1時間返事が来ないと何か不快にさせる

ようなことを書いてしまったかなという心理的な不安みたいなものがあって、自分がそうだから、私は人にも早く返事をするようにしているんです。友達とかに聞いても、そういうふうに言います。人と人とのつながりって、直接会って話すこともちろんなんですけど、ツイッターとか、ミクシィも今、つぶやきみたいなものが出て、ツイッター的な機能が備わったんですよ。そういうものを見ていると、自分の友達が今、何をしているのかってリアルタイムに分かると思うんです。そういうつながりが切れるって、私って自分の所属しているコミュニティーから隔離されてしまった、みたいな心理的な不安があります。

○**山口**　皆さんは、そこまで何をやっているかが知られるという怖さはないんですか。ツイッターでどこどこにいますというのを発信する人が多いじゃない。僕はあれって分からない。

○**渡辺**　全員に公開している人と、自分のフォローをしているフォロワーだけ、友人だけという人がいるじゃないですか。友達には知られても、たぶんいいのか、オープンマインドなんですかね。

○**柳**　感覚としては、私たちの世代は、リアルに生きているというよりも、ネット上で生きているような感覚が強いと思うんです。だから、「私は今ここにいるよ」という存在をネットで示すし、何をしているよということも言うと思うんです。そういうのは好きではないんですけど。

○**山口**　今日のテーマで言うと学びなので、例えば、そういうツールを使って、自分はこういう勉強をしていますよ、みたいなこともあれば教えてください。

○**渡辺**　例えば、この間の大阪市長選挙、橋下さんが勝ちましたよね。あの場合も、「ああ、やっぱり橋下さんが勝ったね」とか誰かがつぶやくと、ああ、市長選勝ったんだとか、そういうニュース的なこととかも聞けたり、あとやっぱり今、就職活動の準備の時期で、いついつ何とかというセミナーがあるらしいよとか、これは予約制らしいよとか、何時から予約開始らしいというのを誰かがつぶやくと、ああ、そうなんだっていうふうに、情報がすごく早いんです。

○**中島**　学習ということ以上に、学生生活を送る上で必須というのかな。

○**山口**　例えば、レポートの締め切りはいつで、みたいなこともそこで出てくるということなの。

○**渡辺**　そうです。

○**中島**　掲示を見ないでそっちのほうから知ったという。

○**渡辺**　いついつまでに専門演習の申込は締め切りだよとか。

○**山口**　だけど、その信憑性ってどうしているの。

○**渡辺**　何人かの友達が同じようにつぶやくんです。3人ぐらい言っているから本当だろうとかいう。

○**山口**　そんなところですか。

○**佐藤**　でも、それはさっきのウィキの、情報の信頼性に対する批判力が必要になる。実は間違っても、誰の責任にもできないから。

○**渡辺**　間違ったことが流れるときは、別で「違うよ」って誰かが言うんです。それがみんなにまた回るから、ああ、違うんだ、みたいな。

○**山口**　世の中分からないですよね(笑)。

○**細井**　立教は特に、ちゃんとしたアナウンスより口コミ力のほうが強いなと思うことがある。例えば、去年とは違うかたちのものになったのに、掲示を出していても、「先輩から聞きました」とか言って、昔のかたちのままで提出してくるとか。

○**中島**　情報環境がよくなるというのはやっぱりメリットとデメリットとあるんでしょうね。
○**落合**　一番デメリットだと思うのは、口だけでやらなくなった人が多くなったなと思う事です。ツイッターとかいうのは、そのとき思った瞬間のことすぐつぶやくんですよ、みんな。自分も含めてそうなんですけど、じっくり考えられていないから、その場でツィートしたことがとりあえず浅いことの積み重ねのようになっているような気がするんです。そういう点では、考えるということについて、よりしなくなったというような気がします。
○**山口**　そのときの怖さってないですか。
○**落合**　大体、ミスをして実名が上がっている人を知っているので、ボーダーラインを心得ています。
○**山口**　なるほど、それはちゃんと学習しているわけね。
○**落合**　そうですね。その辺を考えていない人は、2ちゃんねるとかに名前が上がってしまって炎上するわけです。
○**中島**　じゃあ、そういう怖さはある程度は知っているわけね。
○**落合**　気をつけながら、利用しています。
○**山口**　そういう意味で言うと、ある種のリテラシーというか、そういうことは、もう自分たちの生活の中で身についていっているようですね。
○**落合**　そうですね。昔は、実名でネットをやるなんていうのは、自分も信じられなかったんですけど、最近はミクシィから始まって、自分の名前を入れなければ、もはや参加していても意味がないという流れになってきているので、名前がばれた上でどう行動するかというのは、みんなが考えるところなんです。
○**中島**　大学の情報倫理教育がとうてい追いつかないですね、その辺の進み方具合というのは。君たちのほうで、自分たちがモラルをつくってそれでやっているという。
○**山口**　残り時間が少なくなりました。皆さんたちの感覚、先ほどのメールのやりとりで、例えば教員とのやりとりってあるでしょ。少なくとも教員が、そんな1時間以内に返事するなんていうことはあり得ないと思うんだけど、その辺についての意識はどうですか。
○**渡辺**　先生たちに関しては大丈夫です。ああ、お忙しいんだなって。
○**落合**　先生がお忙しいというのは分かっているので、問題ないですが、やっぱり重要なことに関しては返信をくださるとうれしいです。というのは、先日、知人にある水泳大会への参加についてメールを送った時に返事がなかったのを「認識してもらった」と思いこんでしまって、結局自分がとりまとめていたメンバー全員が出場できなかったことがあったんです。この件で僕も意識のズレというのを実感しました。
○**中島**　その辺の意識のずれでいろいろトラブルも生じることがあるということだね。
○**山口**　そういう意味で言うと、このSNSは、たぶん世代の格差がかなりあって、だから、当然この辺は、大学としての課題だし、我々も若い人たちというか、今の学生がどういう意識でこういうものを活用するかということを知らないといけないし、その上で、より効果的な利用を検討しないといけないという感じですね。
○**中島**　どちらかというと、それは教務というよりは学生の問題で、つまり、こういうものを利用して、例えば新興宗教とか、マルチ商法とか、あるいは薬の売買とかが入ってきちゃうということが、大学側としては一番恐ろしいんだよね。そういうふうに統制がとれ

なくなる。でも、こういう仕組みをうまく使えば、学習効果を高めたりとか、学生との間のコミュニケーションを図ったりとかいうことで、教育にとっても大事な点なのかもしれません。

○**山口**　もし、こういうものを活用して、先生とのコミュニケーションがうまくいっている事例とかがあると教えてもらえますか。

○**落合**　僕が履修している「経営学特論」という授業なんですけど、先生がフェイスブックを必ず登録するように指示しています。フェイスブック上で課題とかも全部、先生がつぶやいて、これについての感想をコメントしてくださいといって、そこにみんなが返信するかたちで、全員のコメントが見られるようになっているんです。

○**中島**　もうBlackboardいらないじゃない。

○**山口**　Blackboardの場合は、もっと採点とか、そういうものまで入っているので、もともとフェイスブックはお見合い用というか。

○**落合**　フェイスブックのコメントも採点対象とおっしゃっていました。

○**柳**　私は今、ビジネススクールでインターンをしているんですけど、主に大学生のTOEICのスコアを上げるビジネススクールなんですが、そこで何々ビジネススクール専用SNSというのを作っていて、そこで学習方法の質問があれば、誰かが質問する。そうしたら、先生が答えるところとか、今日は何の勉強をしたというのを宣言するところがあったり、主に勉強のモチベーションを上げるためにSNSを使っています。

○**山口**　これは、たぶん今の若い人たちにとっては非常にいい環境で、ある意味、存在自体が自然なものなんだよね。普通の生活の中に溶け込んでいるので、それをやっぱり我々教員側も、ちゃんと活用するという方向で考えないといけない。そうすれば有効に使える。

○**中島**　先生はアカウントを持っているんですか。

○**山口**　僕はミクシィも、取り消しになっているかもしれないけどツイッターも、ちゃんとアカウントを持っています。ただ、実際にはツイッターって6件ぐらいしかつぶやいていないんです（笑）。何か教員としてつぶやくのは難しい。

○**細井**　公私の「私」の感じがしちゃうんですよね。

○**山口**　教員の場合って、公と私の使い分けが難しくて、特に、一般的に誰でも見られるところがある。だから、たぶんフェイスブックとかツイッターを授業で使うときに、ある意味、クローズでないといけない部分というのもちょっとあってね。その部分をどう担保するかというのは、一つ課題かな。さらに学生のプライバシーの問題。こういう科目をとっていますということ自体も、外にはあまり出したくない人もいるかもしれないし。そういうのをきちんと、第三者からは見えない状態で、クラス内だけで見られるというのは必要なのかな。ただ、決して教員が、大学の授業を密室でやるということを言っているわけじゃないです。授業内容とかは当然、オープンにならないといけないんだと思うんだけど、ただ、学生を守るという意味というのは、大学としては非常に強く思うんだよね。

○**佐藤**　例えば、ミクシィとかツイッターである必要はなくて、それと似たような使い方のできる、メンバー限定のサービスみたいなものがもしあれば、いいんじゃないでしょうか。

○**山口**　逆に言うと、こういうものがあるのに、わざわざ何でほかのところにいかないといけないのという思いは皆さんのほうにありますか。

○**柳**　はい。

○**山口**　無料だし。
○**細井**　使いやすいしね。
○**中島**　どこでもつながるし。ただ、長い文章を送りたい場合は、情報量という点も大きいんだけどね。添付ファイルにすればいいといえばいいんだろうけれど。メールが携帯になってから、文章も短くなって刹那的というか、ちょっと細かなことを伝えようと思ったら、3本も4本もメールを書かなきゃいけなくなって、あれも不自由だなと思う。僕はまだ携帯文化には慣れないですね。
○**佐藤**　コミュニケーションツールの学習上の利用ということを、最初にあった電子辞書とか、いろいろなものを全部含めて、ちょっと僕が学生の皆さんから話を聞きたいのは、大学にある設備等でもいいし、個人的に持っているものでも何でもいいんですけど、学習をしていく上で、これはやっぱり非常に素晴らしいとか、あるいは、これを使って非常にいい勉強の仕方ができているとか。あるいは、逆に、こういうものはちょっと問題があると思うとか、何かそういうのがあったら聞かせていただきたいなと思うんですけど、どうですか。
○**渡辺**　電子辞書は絶対にあったほうがいいと思います。さっき先生方がおっしゃった、辞書の一覧性ってもちろんそうだと思うんですけど、私は、ボキャブラリーを増やすときに、持ち歩くことができることによって、街中で分からない単語が出てきたらそこで引いて、留学中ずっと、それをメモするようにしていたんですね。そういうことによって、生活の中で使う言葉ってどんどん頭に入っていったんですよ。それが紙辞書だったら、重いし、ずっと持っていなきゃいけないし、その場でこうやって開いて探すのは時間がかかるし、止まらなきゃいけないし。
○**細井**　歩きながら引いていたっていうことなの。
○**渡辺**　歩きながら引いていました。そういう意味では、電子辞書は私はもう本当に必需品で、特に語学の勉強をしていると、日本語に訳せない言葉が出てきたりすることもあるんですよ。辞書を引いてみたら、何か聞いたことのない日本語だった場合に電子辞書だったら、今度『広辞苑』も引けるじゃないですか。でも、紙辞書だったら、その言語の辞書のほかにもう1個『広辞苑』も持っていなきゃいけないという意味で、やっぱりすごく便利なんですよ。
　私の学部は、レポートもその場で先生に提出なので、CHORUSとかはあまり使わないから必要性を感じたことがあまりないんです。何回かしか使ったことがないです。しかも、使ったのが全カリの授業で、専門科目は使わない。
○**落合**　勉強するにあたって、やっぱり自分の学習を振り返る必要があると思うんです。そういうときに、ポートフォリオが自分の中では一番有効です。
　あと、語学のときの勉強に関しては、僕は絶対、紙辞書派です。自分は高校時代もそれを使っていたので、紙辞書に慣れているというのと、やっぱり電子辞書とかだとマーカーを引いたりできない。今はできるのかもしれないですけど。
○**中島**　それで覚えたりね。
○**落合**　大体慣れてくれば、もうぱっとやれば一発で引けるので。
○**山口**　それができない。
○**渡辺**　できないです。
○**佐藤**　この単語はこの辺にあった、と。
○**落合**　そういう使い方もできるから、そこまで苦じゃないんです。やっぱり一番の問題は重いっていうことです。
○**中島**　電子辞書のデータ自体を出すということができないからね。そういうことから言うと、それを使って学習というのは、もういっぺん打ち直さなきゃ、

あるいは書き直さなきゃいけない。
○**佐藤**　でも、さっきそれで調べたものをメモするって言ったでしょ。
○**渡辺**　はい。
○**佐藤**　結局そういうことだと思うんですよ。メモするか、辞書の紙の上のマーカーをするか、それは何でもいいけど、結局、引いて、そのときだけ済ませて終わりじゃなくて、自分に残るかたちで残していって、そこが重要だと思うんですね。
○**山口**　手を動かさないと脳に入らないから。
○**落合**　そうですね。同感です。紙辞書ついて言えば、学校にロッカーがあったらうれしいということですね。
○**山口**　それは何度も言われたけど。辞書もだし、パソコンもだし。教科書は持って帰ってほしいんだけどね（笑）。
○**落合**　そうですね。それで、電子辞書なんですけど、僕は電子辞書の意味が全く分からなくて、どちらかというと。
○**中島**　ちょっと調べるだけだったらスマホで十分。
○**落合**　スマホで全然いけます。
○**細井**　中国語もスマホで使えます。使いやすいものをダウンロードできます。
○**渡辺**　そうです。引きやすいですね。
○**柳**　私は、逆に言うと、ツールは、何を勉強するか、どんな勉強をするかによって違うと思うんですけど、とにかく情報量を頭に入れる、覚えるといった点では電子辞書。それから、私は授業もネットで受けるのも、利便性の点から好きでした。しかし、自分で考えるものになると、アナログのほうが好きで、論文に付せんを貼って自分の意見を書いておくとか。学年が上がるたびにアナログの勉強方法が多くなっているように思います。
○**山口**　なるほど。今日はみなさんから非常に興味深いお話しをうかがうことができ、私たち教員としても、新たに気づくところがありました。予定の時間もだいぶ過ぎましたのでこれで終了にしたいと思います。みなさん、どもありがとうございました。